高精細カラー版

原本を体感！ 筆遣いの機微まで読み取れる

新 天理図書館善本叢書

第三期

源氏物語 全十巻

2016年6月刊行開始

源氏物語の新たな底本として！

源氏物語 池田本

五十二巻のうち四十八巻が鎌倉末写の基幹巻

定家本（青表紙本）系統の諸本中、最重要古写本の全貌を初公開！

【解題】岡嶌偉久子 天理図書館貴重書室

内容見本

八木書店
YAGI BOOK STORE LTD.

Shin Tenri Toshokan Zenpon Sosho This new series offers full color, high resolution facsimiles of the special collections possessed by Tenri Central Library.The third distribution is “Genjimonogatari, Ikeda-bon” or “The Tale of Genji” formerly possessed by Ikeda Kikan. This book is considered to be the most important old manuscript among various copies in the Aobyoshi-bon line. The 48 volumes among 52 volumes of this manuscript are the fundamental volumes copied by hand in the late Kamakura period. This is the first time the entire manuscript is published.

【推薦のことば】

池田本源氏物語という至福

大阪女子大学名誉教授
文化功労者
片桐洋一

『古今集』『後撰集』『拾遺集』『伊勢物語』など、我が国の基幹となる古典文学の本文研究に永らくかかわって来た私の実感は、練り上げられるようにして整えられた藤原定家書写本系本文の優秀性には動かぬものがあると思っている。

中でも、ここに紹介する池田本『源氏物語』は、不世出の源氏学者池田亀鑑博士の御愛蔵本であり、典雅にして学問的緻密さに富み、まさに善本と称するにふさわしい。私は陽明文庫の鎌倉期書写本（ただし不揃い）以外に、これに類する風韻のある本を見たことがない。

これまで、一般には同じ定家本系統の中でも、『源氏物語大成』の底本になっている大島家旧蔵本の方が尊重されてきたかに見える。しかし私は、この池田本の古雅なる品格に魅せられてしまうのである。

さらに近年の研究では、池田本が鎌倉末期以前の『源氏物語』本文を伝えている可能性が云々されている。

従来、池田本の本文は『源氏物語大成』の校異欄でチェックできるだけであったが、この度、高精細カラー版によって、その形姿と本文全文をじっくりと見ることが出来るようになる。『源氏物語』本文の本格的な再検討が期待できるのである。これを至福と言わずして何と言おうか。

池田本の奥入について

早稲田大学教授
新美哲彦

池田本は鎌倉期写四十八巻四十五冊が基幹本文ということでも注目されるが、そのうち十一巻に「奥入」が付載されることでも注目される。

藤原定家の注である「奥入」は、名前の通り、もとは『源氏物語』写本の奥（巻末）に定家が記した注で、その注部分を切り出して一冊にした定家自筆本『奥入』が現存し、それとは別の系統の『奥入』も二種存在する。さらには、池田本や大島本のように、『源氏物語』写本巻末に付載される「奥入」も、少数ではあるが存在しており、それら相互の関係は「奥入」の成立や流布を考える上で興味深い。

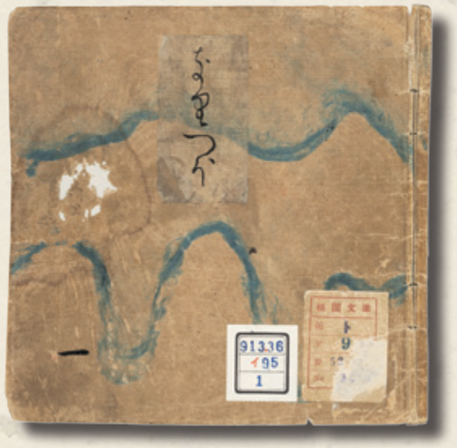
池田本には、『源氏物語』本文と同筆の「奥入」が八巻に付載される。同筆の「奥入」は、定家自筆本『奥入』とは系統が異なり、内閣文庫本系と呼ばれる系統の上位本文と判断され、鎌倉期の「奥入」の実態を知る上で貴重である。さらに、定家が注釈部分を切り出す以前の「奥入」と重なる可能性があり、定家本（青表紙本）『源氏物語』本文を考察する上でも重要である。また、三巻に付載される、『源氏物語』本文とは別筆の「奥入」は、さまざまな系統の本文を有しており、当時の持ち主が時間をかけて各種の写本や注釈書から書き込んだかと考えられる。

今回、池田本が高精細カラー版で刊行されることで、紙焼き写真では迷うことの多かった同筆・別筆の判断、墨色や筆勢の比較などが大変容易になる。池田本には本文行間の別筆による注や「奥入」とは異なる巻末勘物も多いが、池田本の形成過程についての研究も、今後進んでいくことが期待されよう。

池田本『源氏物語』本文についての研究が蓄積していくことによって、『源氏物語』の本文研究は新たな段階に入るのではないだろうか。

※詳しくは拙稿「池田本『源氏物語』巻末付載『奥入』について」（天理図書館報『ビブリア』144号、二〇一五年一〇月）参照。

池田本の全姿と雲紙表紙



桐壺　巻頭と奥入

【第3期　源氏物語 池田本】書目略解

天理図書館貴重書室
岡嶌偉久子

本書は、かつて池田亀鑑「桃園文庫」の所蔵であったことから「池田本」、あるいは「二条為明筆」との極札を持つことから「伝二条為明筆本」とも呼称されている。『源氏物語』五十四巻中、花散里・柏木巻を欠いて全五十二巻四十九冊。この内、後からの取り合わせである四巻（賢木・東屋・蜻蛉・手習巻）を除く**四十八巻が成立当初の基幹の巻々であり、その筆致・紙質・装本の趣等から鎌倉末期の成立**と認められるものである。

『源氏物語大成』校異欄には略号「池」として採録されている。その中で、基幹の四十八巻はすべて青表紙本としての採録で、桐壺・初音・浮舟・夢浮橋の四巻については、『大成』底本である大島本が欠巻、あるいは時代の下った後補等であるために、本書池田本が底本となっている。すなわち、**池田本の鎌倉期写基幹巻四十八巻は揃って青表紙本**との認定である。「青表紙」とは、定家が整えた『源氏物語』写本に対する鎌倉末期頃からとも見なされる呼称であり、後世、その系統の本文は青表紙本と呼ばれてきた。

このような池田本は、『源氏物語』の鎌倉写本中、成立当初の基幹巻を最も多く保持（四十八巻）する写本であり、同時に、その四十八巻の本文がすべて青表紙本で揃っていることは、青表紙本鎌倉写本において現在のところ他に類例がない。更に、**この基幹巻四十八巻は書写者がほぼ二手に集約**される。中でもその内の、仮に甲筆とした**三十六巻は整った一定の筆致であり、この内の八巻には、本文と同筆の「奥入」が付載**されている。

青表紙本におけるこの「奥入」の存在は特異なものである。定家が『源氏物語』本文を整えた時、その各巻末に書き入れた簡略な勘物である「奥入」、その有無こそは『大成』においての青表紙本伝本価値判断の最も重要な事項の一つであった。先述した数々の希有な特徴を持つ本書池田本が『大成』の底本とならなかったのは、池田本の奥入は一貫しておらず偏ったもの、という池田氏の判断が大きく左右したとも言われている。

池田亀鑑氏の評価は「大島本ニ次グベキ地位ヲ有スル池田本」であった。室町期の写本である大島本が『大成』の底本となった経緯、また、その幾つかの理由については今は省くが、周知のように、大島本は三十八巻の各巻末に「奥入」を付載していること、それが最も大きな理由の一つであった。しかし、その後「奥入」についての調査・研究は様々に進展し、池田本の「奥入」は最も初期の形態に属するものか、との再評価が行われている。

鎌倉写本としての池田本の姿を見るとき、一枚添えられた後補の雲紙表紙（室町期）の次には、成立当初の本文共表紙がそのまま残されている。鎌倉期の本文に対しては、室町期の勘物に類する書込の他にはほぼ手が入っていない。すなわち、鎌倉期の本文・姿を明瞭にたどれる写本であると言ってよい。

更に、この基幹巻四十八巻は、先に述べたように書写者がほぼ二手に集約され、その内の甲筆とした三十六巻は実にむらのない一定の筆致である。この様な写本においては、その底本は巻単位で寄せ集められたものではなく揃いの『源氏物語』写本であった可能性が、多人数によって分担書写された寄合書きの場合よりも、やはり高い。そして、この甲筆筆者の書写態度については、巻単位の段階ではあるが、底本に極めて忠実なものであることが指摘されている。池田本は、**鎌倉末期よりも更に遡る、揃いの『源氏物語』本文を忠実に伝えている可能性に満ちた伝本**である。

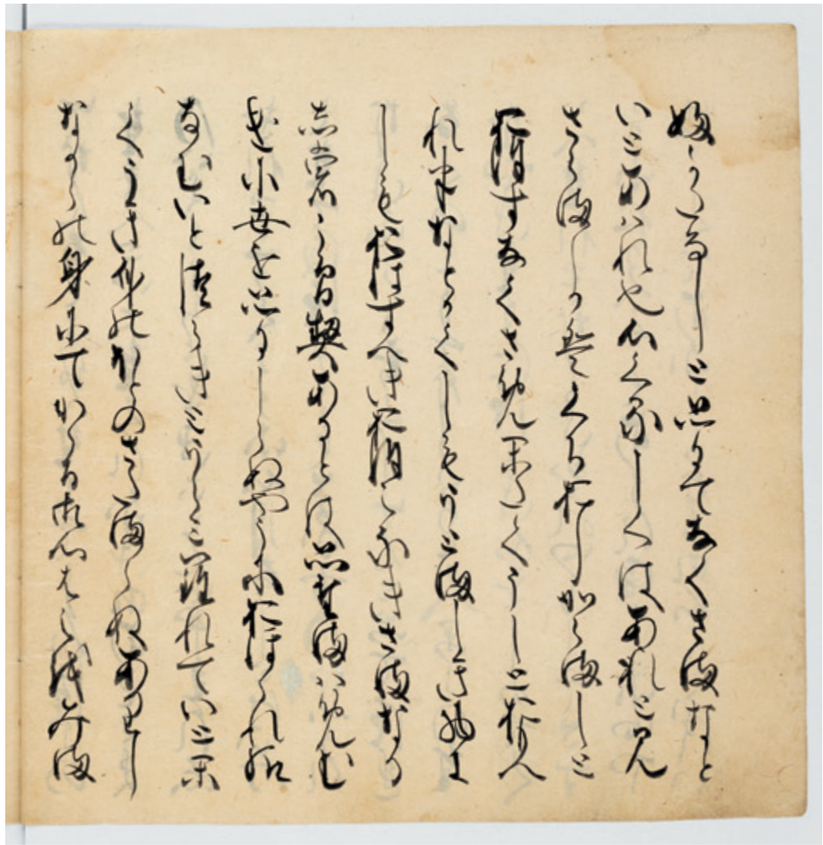
日本文学の世界における定家の存在の大きさから、定家の整えた青表紙本系の本文は室町期以降現在に至るまで、ほぼ『源氏物語』鑑賞・研究の基底本文であったと言ってよい。しかし、近年、この青表紙本に対しての様々な疑義・見解が報告され論じられている。青表紙本の概念そのものが揺らいでいるとも言える現今の状況において、鎌倉期成立当初の基幹本文四十八巻をそのまま保持している池田本は、**向後、中心的な役割を果たす伝本**となると思われる。

池田本『源氏物語』の特長

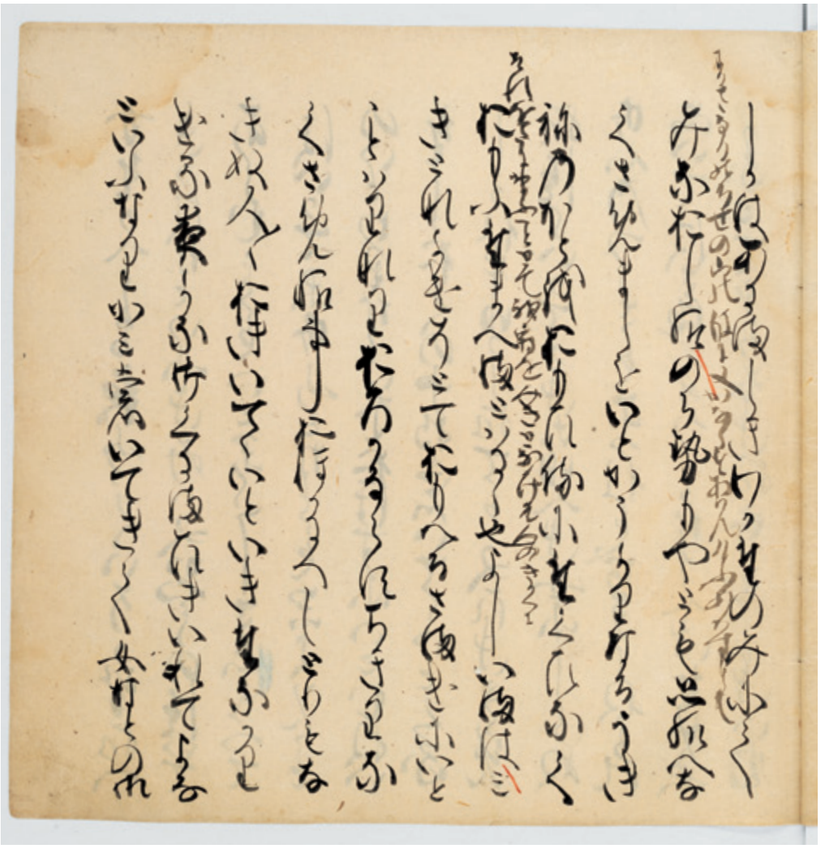
- ●『源氏物語』の鎌倉写本中、成立当初の基幹巻を最も多く保持（四十八巻）。
- ●基幹巻の本文は全て青表紙本で揃っており、鎌倉写本として他に類例なし。
- ●基幹巻の書写者はほぼ二手、その一手の三十六巻は整った一定の筆致。
- ●基幹巻のうち十一巻に「奥入」あり、そのうち八巻は本文と同筆。

●影印本文見本（A5 判原寸）原本からの縮率 80%

第 2 冊　帚木（52 ウ）



第 2 冊　帚木（53 オ）



刊行の辞

天理図書館は、本教がひろく典籍・文献類の蒐集を通して、道をひろめ、人を育て、世界文化に貢献することをめざして創設されたものであります。昭和五年の開館当初は、宗教・思想・言語等の諸分野からはじまったものが、次第に歴史・文学・社会・諸芸能などにおよび、これらの上に、戦後、種々の機会に収蔵された世界的善籍・稀覯書を累加して、古今にわたる文化資料の集成を見るにいたりました。

本館は、創設者である天理教二代真柱中山正善の志―蒐集、保存、活用―を体して、これまでも種々の複製事業を行ってまいりました。中でも、その画期的事業と申すべきものが、昭和四十六年十一月、二代真柱の命日を以って刊行を開始いたしました『善本叢書』和書之部全八十巻、漢籍之部全十二巻、洋書之部全四十八巻であり、その後の『綿屋文庫俳書集成』全三十六巻に及ぶ出版でありました。

これらの影印本は、その刊行以来、各方面において活用いただいておりますが、すでに三十数年の歳月を経、近年、影印複製技術の急速な進歩により、高精細フルカラーによる影印本の刊行が、各方面から求められるにいたりました。

此の度、既『善本叢書』中から、ことにフルカラーの情報が求められております史籍・古辞書類、古奈良絵本類を選び、また、未だ刊行を見合わせておりましたその他の奈良絵本類、及び、藤原定家・芭蕉・西鶴の自筆類等々を選んで、『新善本叢書』全三十六巻として刊行をいたす次第であります。前回と同じく、製作発売・八木書店、製版印刷・天理時報社と共に、本事業を開始できますことを心から感謝いたすところであります。

各方面の皆様に活用されますことをお願い申して、刊行の辞といたします。

平成二十六年十一月

天理図書館長　**諸井慶一郎**

天理図書館について

大正十四年（一九二五）三月、中山正善天理教二代真柱によって、本教の総合図書館設立が計画された。翌十五年十一月、約二万六千冊をもって閲覧を開始、その後、昭和五年に現天理図書館本館が竣工し、現在の活動の第一歩が踏み出された。以来、満十五歳以上のすべての人々に広く公開して、天理大学付属図書館であると同時に、宗教研究・一般学術研究の専門図書館として様々な活動を続けている。

現在の蔵書数は約二百万冊。宗教学・東洋学・オリエント学・民俗学・地理学・言語学、中でも国文学等において精選された資料の蒐集を続け、これらの分野では極めて貴重な文献を数多く所蔵している。

こうした所蔵資料の公開・利用のために、一般蔵書目録の他にも、各種の貴重書目録・主題目録、また、貴重資料の影印複製・各種図録類を刊行。館報『ビブリア』（現在、第144号）では、所蔵資料の紹介・翻刻等を行っている。

天理図書館　正面と貴重書庫

■編集方針

新編集による高精細カラー版

◆「天理図書館善本叢書和書之部（1971～1986）」刊行後の研究進展・印刷技術の発展を鑑み、時代に即した新編集で「新天理図書館善本叢書」を刊行する。

◆天理図書館所蔵の和書の中から、主に国史・国語・国文に関する資料的価値の高い善本を選択し、高精細カラー版オフセット印刷により影印する。

◆収録候補に上がった書目を、時代別・分野別に分類し、両者を総合して数期に分け、逐次上梓する。

カラー版に向く貴重書を精選

◆選択する底本は、伝本中、一の基準を代表する優品であると共に、特にカラー版影印によって学界に裨益する内容であることを期する。

◆新資料の紹介はもちろん、かつて複製されたものであっても、カラー版の大型判型によって更なる原本情報を提供できるものは、これを加える。

利用しやすい編成と編集

◆判型は、原本の形態に応じて菊倍判・A4判（縦・横）・B5判・A5判を適宜採用し、各判型毎に利用しやすい頁数を考慮の上、類聚ないしは分冊編成する。

◆影印本文の各頁には書名・巻次・項目名等の柱を掲出し、巻子本の紙数・冊子本の丁付を本文下欄に表示し、利用の便を図る。

解題は全て新規書き下ろし

◆解題は、簡明にして正確な記述に主眼を置き、各書目について専門的知見を有する研究者へ依嘱する。

◆「善本叢書」既収録の書目についても、旧版刊行後の研究進展による旧解題内容の修正、および新たな知見などを加味した新規解題を収載する。

◆訓点が多数施されている書目については、解題に加え、専門研究者による訓点解説を収載する。

■印刷・造本

高精度のデジタル撮影

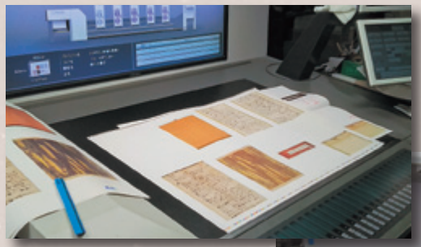
◆高精度デジタル撮影（約2,230万画素）による画像データを使用し、可能な限り豊富な原本情報の再現を図る。

最新技術による最高度の製版・印刷

◆製版は、高精細イクオス・スーパーセル（260線）を採用。

◆印刷は、ハイブリッドUVシステムで厳密に色再現。

●最新の印刷機
KOMORI LITHRONE G40



●ハイブリッドUVシステム
のコントロールパネル

厳密な校正点検

◆製版された画像データを用いて、小社編集部がDTPソフトでトリミング・柱の掲出・紙数表示等の割付を行い、ページアップ校正を出校、天理図書館担当者・解題執筆者が確認を行う。

◆色校正に際しては、原本と照合点検の上、その再現に厳密を期する。

印刷立会いによる最終チェック

◆印刷時には、天理図書館担当者・小社編集担当者が立会い、各台（8頁もしくは16頁毎）刷り出し時の版面点検・色調整、印刷時の抜取り検査等を厳格に行う。

●印刷立会い　刷り出しのチェック

技術的研鑽を重ねた印刷所

◆製版・印刷は、「天理図書館善本叢書」「正倉院古文書影印集成」「尊経閣善本影印集成」等で、技術的な研鑽を重ね、優秀な実績を積んでいる天理時報社が担当。

カラー影印に最適な用紙

◆カラー版オフセット印刷に適し、かつ原本の風合いを生かせるよう光沢を抑えた高級微塗工紙（中性紙）を使用。

堅牢な製本

◆糸かがり、上製クロス装とし、堅牢にして日常の連用・長期保存に耐える製本とする。

新 天理図書館善本叢書

第三期 源氏物語 池田本 全十巻 配本予定

高精細カラー版

●池田本五十二巻のうち、後補四巻（＊印）以外の四十八巻は全て鎌倉末写の基幹巻

古典研究者・図書館必備の新シリーズ！

第13巻　第1回配本（平成28年（2016）6月）
源氏物語一　桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫　〔9563-3〕

第14巻　第2回配本（平成28年（2016）8月）
源氏物語二　末摘花・紅葉賀・花宴・葵・賢木＊　〔9564-0〕

第15巻　第3回配本（平成28年（2016）10月）
源氏物語三　須磨・明石・澪標・蓬生・関屋・絵合・松風　〔9565-7〕

第16巻　第4回配本（平成28年（2016）12月）
源氏物語四　薄雲・朝顔・少女・玉鬘・初音・胡蝶　〔9566-4〕

第17巻　第5回配本（平成29年（2017）4月）
源氏物語五　蛍・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱・梅枝・藤裏葉　〔9567-1〕

第18巻　第6回配本（平成29年（2017）6月）
源氏物語六　若菜上・若菜下　〔9568-8〕

第19巻　第7回配本（平成29年（2017）8月）
源氏物語七　横笛・鈴虫・夕霧・御法・幻・匂宮・紅梅　〔9569-5〕

第20巻　第8回配本（平成29年（2017）12月）
源氏物語八　竹河・橋姫・椎本・総角　〔9570-1〕

第21巻　第9回配本（平成30年（2018）2月）
源氏物語九　早蕨・宿木・東屋＊　〔9571-8〕

第22巻　第10回配本（平成30年（2018）4月）
源氏物語十　浮舟・蜻蛉＊・手習＊・夢浮橋　〔9572-5〕

※各巻ISBN下5桁

【解題】岡嶌偉久子

【ご購入の案内】第３期 2016年６月刊行開始！

- 造本　A5判／上製本／クロス装／貼函入／平均約550頁予定
- 製版・印刷　イクオス・スーパーセル260線／ハイブリッドUVシステム
- 配本　上記参照（第２期・第３期は並行して刊行し、配本間隔は変則となります）
- 定価　第３期全10巻セット予価（本体340,000円＋税）
  ISBN978-4-8406-9592-3（セット）
- 各巻分売可　第３期各巻予価（本体34,000円＋税）

シリーズ各期ご案内

●既刊　＊分売いたします

【第一期】国史古記録　全六巻　二〇一六年二月完結！
●全六巻セット　本体一六五、〇〇〇円

第1巻　古事記　道果本　播磨国風土記
菊倍判／二〇〇頁／本体二六、〇〇〇円

第2巻　日本書紀　乾元本　一　神代上
菊倍判／一八四頁／本体二九、〇〇〇円

第3巻　日本書紀　乾元本　二　神代下
菊倍判／一六八頁／本体二九、〇〇〇円

第4巻　古語拾遺　嘉禄本・暦仁本
菊倍判／一六〇頁／本体二五、〇〇〇円

第5巻　明月記
A4判横本／一七〇頁／本体二七、〇〇〇円

第6巻　定家筆古記録
A4判横本／二三四頁／本体二九、〇〇〇円

●続刊　＊予約募集中！

【第二期】古辞書　全六巻　二〇一六年四月刊行開始
【第四期】奈良絵本　全八巻　二〇一八年十二月刊行開始
【第五期】連歌俳諧　全八巻　二〇二〇年四月刊行開始

【発売】八木書店
YAGI BOOK STORE LTD.

〒101-0052　東京都千代田区神田小川町3-8
● TEL　03-3291-2961［営業］　03-3291-2969［編集］　● FAX　03-3291-6300
● E-mail　pub@books-yagi.co.jp　● Web　http://www.books-yagi.co.jp/pub

2016.2　TP 22000